

7. 退任者の声

退任にあたって

内田 勲（広尾）

今思うとあつという間の教頭・副校長の12年間でした。特に最終の平成22年度は、私的な事も重なり特に早く感じました。何を書いて良いのかははっきりしませんが、私が教頭・副校長として赴任した3校の状況と、職務として心掛けていた（心掛けるべき）ことや感想を述べます。

初任は、平成11年4月に戸山高校定時制に着任し4年間務めました。

この学校は定時制の“学習院”と言われるように、3年間で卒業できるシステム「三修制」を全都に先駆けて採り入れたため、落ち着いた中で学習や部活動ができる環境がありました。また、全日制は進学重点校として、全都に先駆けて入学選抜問題の自校作成に取り組んでいました。そのため部屋が足りないということで、定時制の自習室を貸し出すなど、全日制教頭と施設面だけではなく、サービスや提出書類の作成等についても頻りに話し合いを持ち、新米教頭にとっては大変有り難く思いました。また、学区の教頭会も盛んであったため、課題等についても適切なアドバイスをいただきました。

次は、調布北高校に3年間務めました。定時制と全日製の規模の違いは、あらゆる面で大きな違いとなって現れ、特に最初は戸惑いました。

この年に、校長、副校長、事務長3人が新しく入れ替わりました。着任して早々の入学式は、フロア形式の入学式で、全都で4校だけであったと記憶しています。その年度の卒業式からは、通常の壇上での式典に変えました。この学校では、学習や部活動にも生徒は積極的でした。教員は、授業等の学習指導に真剣に取り組んでいました。

最後に、広尾高校に5年間務めました。3年目に異動も考えましたが、他校の新しい環境で2年間を務めることに煩雑さを覚え、改革を実行・継続している広尾高校で少しでも役に立てるのであればと思い残留しました。この学校は、都心に位置し交通至便の中堅校ということで、

人気はあるが生活指導に難のある学校でした。また、自主自立を重んじ過ぎたために、生徒指導への対応が遅れてしまったようでした。それを打開するために、部活動を活性化し、制服を導入しました。さらに、現在は進学指導にも力を入れてきています。

以上のような特色ある学校を経験して、副校長として気を付けてきたことについて述べます。

1 誠実に仕事を行う

多忙極まる職務だが、特にサービスに関しては、妥協を許さないよう心掛けている。こちらのスタンスが分かれば、教員は無理難題を持ち込んで来なくなるし、職務上大変な時には、協力する者も出てきた。

2 仲間をつくる

分からないことや判断が付きにくい時に、連絡が取れ、互いに相談し合える人を持つことが大切だ。

3 仕事を分散させる

副校長として、一人で仕事を抱え込まず、適正に割り振ったり、良いタイミングでの依頼を行う。

4 何事にも策を持つ

問題が発生しそうだと感じたら、そのことについて策を考えておく。策が受け入れられなくとも、それはそれでよしとする。

5 自分の趣味を持つ

激務を乗り越えるためには気分転換が必要です。趣味を活かして、次の業務に臨みましょう。

振り返って思うこと

小澤 時男（白鷗）

副校長として、その時どきで課題に出来るだけ取り組んできたが、今となって思うことを記してみたい。

平成9年度から都立高校改革が始まった。平成13年度には学校の外部委員の意見や生徒・保護者・地域の意見を聞き、学校を外に開いて、学校の質的向上をめざす学校運営連絡協議会が

スタートした。学校長の学校経営方針や学校の内部委員から教育活動の説明、学校評価アンケートについての検討、外部委員の授業参観など、学校の中に新しい活動が導入され、新しい風が吹き始めたのを感じた。

その内容は、学校の教育活動について、当該年度の目標を具体的に設定して、目標の達成状況や達成に向けた取り組みの状況から、取り組みが適切であったかを確認し、その改善方法を検討する。そして、生徒、保護者、地域住民から寄せられた学校評価アンケートの結果や具体的な意見や要望を活用して、学校をよりよい教育環境となるよう改善していくことであった。

こうした中で、保護者と学校行事や研修会を共催したり、地域の行事に生徒・教員が参加して、学校、家庭、地域が共通認識を持ち、その連携協力により地域を盛りたて、学校運営の改善を図り、結果学校が大きく成長していくようなことをもっと進めることが必要であると思う。こうした活動は、学校の各校務分掌に年間ひとつ分担し、主幹・主任を中心として段取りを検討して実施し、活動内容を年ごとに改善して、高める教育活動にしていく。こうした活動を通して教育活動を活発にし、学校の質的向上を図ればよかったと考えている。

もう一つ、今まで都への書類を期限いっぱいまで引っぱって提出していた。しかし、今年度は、何か新しいことに取り組もうと考え、都からの文書がきたら出来るだけ早く仕上げて提出した。それによって、時間的にも余裕ができ、精神的にずいぶん楽になった。本校職員にもこの方法を進め、実践する主幹・主任ができた。ぜひ皆さんにもこのことをお勧めしたい。

最後に副校長会の皆様には、大変お世話になりました。ありがとうございました。

退職は一つの通過点

小林 淑訓（大崎）

私は、平成8年からの15年間、大森高校、飛鳥高校、富士高校そして大崎高校と4校の都立高校でお世話になりました。定年退職まで、またたく間に時が過ぎたことを実感しています。

副校長は「クロコ」、校長の下、校長を陰で支

える存在であると思いながら勤めてきました。学校の何でも屋である副校長の仕事は、多忙を極めますがその分醍醐味もあったと思います。

学校予算の削減、授業料未納者の増加など不況の影響も見られ、保護者や地域の学校に対する目も厳しくなってきました。その分、住民の苦情がダイレクトに寄せられ、一つの分掌や学年では対応できない状況も多くなっています。

勤務時間が過ぎたころ、担任や主任が、生徒の指導や保護者の対応で私のところに来て話し合ったことや、病気になったり心を病んだりして休業や退職する教員、そこまで行かなくても体調を崩す教員もいて学校の台所は火の車という状態もありました。

私は、一人ひとりの教員が働きやすい環境づくり、特に真面目に努力している教員が腐ることがないようにすること、職場の中で教員を孤立化させないことを心がけました。校長と相談しながら、日常の声掛けや、教員に仕事を依頼するときは、時間の余裕を持って何度も足を運びました。刑事コロンボのドラマでヒントを得て、工夫したこともありました。

遅刻や頭髪で、地域住民の苦情、支援センターの指導を受け、生活指導主任と学年主任で組織した健全育成会議を立ち上げ、学期単位の段階的指導、さらに指導に従わない生徒への指導を学校として行いました。十分な成果を得られたとはいえませんが、校長、教職員が、取り組みの中で一体感を持てたことを喜び合ったこともあります。学校を組織化することの大切さを再認識した瞬間でもありました。

こんなことも思い出します。生活指導の大きな転換を、校長が生徒に知らせる全校集会で、体育館に来なかった教員に、生徒全員が集まる場所に来ないほど重要な仕事はないと説き、必ず出るようにさせたこと、教員が授業をサボった生徒等を全校放送で呼びつけることを辞めさせたこと、いつも始業時間ぎりぎりに出勤する教員に余裕を持って出勤するよう指導もしました。しかし、学校にとって一人ひとりの教員が大切なスタッフ、このスタッフを最大限に活かすことこそ副校長の仕事であったと思います。私が若い教員を叱咤激励し、一緒に小さな一体感や喜びを分かち合えることがなくなることは寂しい限りですが、副校長の先生方が、教員で

あることの喜びを是非若い先生に伝えていただきたいと思います。

副校長の仕事は、地味でしんどい仕事です。今思うと副校長の15年間自分を見つめ直し反省と挑戦の連続であったと思います。自分のありのままを知ることができたと思います。大切なのは、謙虚に心から自分が納得できることを積み上げて行くことと思っています。どうぞ、副校長の先生方はご自分自身の健康の保持・増進を心がけられて“グッド ジョブ”をなされんことを、さらに東京都立高等学校副校長会が、皆様のお力で益々発展されることを心より祈念いたします。

最後に、私は「学ぶことと教えること」の原点に立ち戻り、今後も元気である限り東京都の一隅で「教育」を探求して行きたいと思います。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

副校長会をはじめとする都立高校のお世話になった皆様、15年間本当にありがとうございました。

